

本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動）	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
1 個別最適化に対応し、学力を最大限に伸ばす学習指導	総務課	・生徒の意欲を引き出し、実践的英語力を伸ばすためにグローバル活動に参加する機会を充実させる。 ・英語科と連携し英検対策学習システムを構築する。	・国際交流活動に積極的に取り組んだ生徒数 (R3 48名) 4: 100人以上 3: 60人以上 2: 30人以上 1: 30人未満	・グローバルマインドと実践的英語力の育成を目指して新規策定された「グローバルプログラム」に基づいて、計画的に実践している。姉妹校カシミア高校とのオンライン交流では、時差3時間のメリットを活用した授業時間での実施が定着した。 ・新規企画した校内短期留学は業者のプログラムを活用して最小の負担で大きな効果が得られる行事となった。(30人参加) ・英語科と連携して葦岡セミナーで英検対策講座とオンライン英会話を新たに始めた。これから2回目を実施して、より効率的な実践を検討する。	A	・カシミア高校とのオンライン交流を8回実施し、2年次生312人全員が交流することができた。 ・新規行事を企画し、多くの生徒が関心をもって参加した。 ・国際交流活動に積極的に取り組んだ生徒数 366人(カシミア高校とのオンライン交流授業312人 短期校内留学39人、オンライン英会話15人) 達成基準4	A	【課題】 課内外の協力を得て、多くの新規行事を立ち上げることができたが、大きな負担がかかる時期もあった。コロナ禍で立ち上げた新規行事とコロナ前の行事と、取捨選択、整理が必要である。 【方策】 新規行事(短期校内留学、オンライン英会話、英検対策講座、英検準会場)とそれ以前の主管行事の整理、調整を図り、実施回数や時期を検討して計画する。	B
	教務課	・新教育課程に対応した評価のあり方の研究、教育課程の再検討を教科を中心として進め、教務課がとりまとめて2回以上の報告を行う。 ・少人数講座、習熟度別講座の効果的な運用についての検討を進める。	学校自己評価アンケート(生徒) ①5「先生は生徒の学力が伸びるよう授業改善に努めるなど、様々な教育活動に取り組んでいる。」肯定的評価の割合(R3生徒88%,保護者84%) 生徒 保護者 4: 95%以上 4: 90%以上 3: 90%以上 3: 85%以上 2: 80%以上 2: 75%以上 1: 80%未満 1: 75%未満	・新教育課程に関連して第1回定期考査では観点別評価に基づいた考査問題の作成に関する資料を、第2回定期考査では観点別評価の進め方についての資料を作成し、周知徹底を図った。 ・教育課程の変更を検討する中で、少人数講座、習熟度別講座の運用についても検討を進めている。	B	・新教育課程の生徒指導要録の記入方法について検討し、周知を図った。 ・「情報」の単位数増に合わせて教育課程を再検討し、個別最適化をよりいっそう推進した教育課程に変更した。 ①5 学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) 生徒 87.5% 達成基準2 保護者 86.4% 達成基準3	B	【課題】 新教育課程の観点別評価について、全教員への周知徹底を図る必要がある。教育課程に関しては、「情報」に関連して検討する必要がある。 【方策】 新教育課程も2年目となるので、再度評価のあり方、観点別評価に基づいた考査の作成について全教職員に周知できるよう、資料を作成配布する。教育課程の変更がある場合には、遅滞なく進める。	
	進路課	・生徒個々の学習進捗に最適化された選択課題の研究を進める。また、スタディサプリなどのICT教材を有効に活用し、主体的な学びとリメディアルな学びを促進する。スタディサプリ到達度テストとその結果に紐付いた連動課題配信を年間2回実施する。 ・教科全員で、3年の実力考査の問題(知識・理解、思考・判断、知識の活用力を測る)の作成と分析(難易、到達度、校外模試との相関など)を行い、学力を高い精度で評価できる指標を作成する。 ・教科科目で実力考査の作問検討や分析、大学入試問題研究や、予備校主催の入試研究会参加後の情報共有など、年間5回以上の教科会議を行い、教科指導力の向上を目指す。	5教科の問題研究や研修プログラム共有のための会議の実施回数の平均値で評価。 4: 年7回以上 3: 年6回以上 2: 年5回以上 1: 年5回未満	・実力考査の到達度に応じたレベル別のスタディサプリ等の選択課題を提示。また、各年次年間2回(春、夏)到達度テストを実施、現在はその結果をもとに2回目のスタディサプリ連動課題の配信を準備中。 ・各教科が定期的に会議を開催し、実力考査の共同作問やその結果分析を行っている。単回の試験と外部模試との相関は出題分野の偏りもあるため未だ十分ではないが、今後回を重ねることにより精度の向上を図る。 (実力作問、結果分析、入試問題研究にかけた教科会議の回数;国9回、数6回、英2回。地歴4回、理18回)	A	・スタディサプリ到達度テストを全年次春秋2回実施。その結果に紐づいた個別の課題を配信した。また、共通課題の精選と到達度別選択課題など個別最適化な学びをより一層進めてきた。学校一斉導入から3年が経過したICT教材「スタディサプリ」は、生徒の主体的学習の一助となり学習意欲の喚起に結びついている。 ・学力向上委員会と連携して、各教科に新しい学力の評価指標(知識活用、思考判断、知識創造)を測る実力考査の共同作問とその分析、また、そのための入試問題研究を奨励した。実力の作問、結果分析、入試問題研究にかけた教科会議の回数は、国11回、数10回、英8回、地歴7回、理28回(1月末現在) 平均12.8回 達成基準4	A	【課題】 課題が多すぎるという生徒からの否定的な意見は減少し、指導に対する肯定的な評価が増えている。一方で家庭での学習状況は十分であるとの問いに対する評価は生徒53.1%(R3-0.1%)保護者51.5%(同-0.8%)と低い。 【方策】 定期に実施している学習実態調査の結果からも家庭での平均学習時間が目標値を下回っており、近年のコロナ禍の影響で家庭での学習習慣が定着できていない生徒が増えている現状がうかがえる。これらの状況を教員間で共通認識し、「予習→授業→復習+α」の高校学習の黄金のサイクルを早期に習慣づけていくことが必要である。	
	探究課	「思考力・判断力・表現力」を伸ばす多様な学びを進める授業実践 ①年間2回教員相互の授業参観の機会を設定し、授業改善、学力向上につなげる。 ②公開授業に外部講師を招聘して指導・助言を受ける。 ③学力向上ワーキンググループ、学力向上委員会と各教科が連携を取り、教科会議を有効活用して授業振り返りや学力分析、大学入試問題研究等を行う。	学校自己評価アンケート(生徒) ①5「先生は、生徒の学力が伸びるよう授業改善に努めるなど、様々な教育活動に取り組んでいる。」肯定的評価の割合(R3 生徒 87.7%) 4: 93%以上 3: 90%以上 2: 80%以上 1: 80%未満 ②4「教科会議や校内外の授業見学などを通じて授業改善を進めている。」肯定的評価の割合(R3 教職員 87.5%) 4: 93%以上 3: 90%以上 2: 80%以上 1: 80%未満	①・6月に第1回授業公開期間を設定した。授業参観予定・授業者へのコメントをフォームで入力してもらい、参観計画、授業者へのフィードバックに活用した。(授業参観のべ83回・授業コメント68件) ・ICTを活用した授業の実践例をとりまとめた。(職員会議で報告する予定) ②第2回授業公開(10-11月)に向けて各教科で研究テーマに基づき研究授業を計画している。 ③・今年度は国語・数学・英語科会議が週時程内に設定され、授業改善や入試問題研究等に活用されている。 ・教科指導力向上の取組として、入試問題研究、3年実力考査作問を教科で検討した。(一教科あたりおよそ8回実施)今後進めていく。	B	学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) ①5 生徒 87.5% 達成基準2 ②4 教職員 90.6% 達成基準3 ・「思考力・判断力・表現力」を伸ばす授業実践のまとめとして11月に各教科の研究授業を実施した。教科でテーマを決め、外部講師に指導・助言を依頼することにより、授業改善の方向性を共有することができた。	B	【課題】 生徒に身につけさせたい力を見据え、授業改善や入試問題研究にさらに取組む必要がある。 〈方策〉 ・全体テーマのもと、各教科で授業力向上に取り組む。 ・授業力向上のための入試問題研究、実力考査作問・検討を推進する。 ・授業参観の推進等により、多様な学びを取り入れた授業を実践する。	

本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動）	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
1 個別最適化に対応し、学力を最大限に伸ばす学習指導	1 年次	生徒個々の特性・能力に応じた助言をするため、面談する機会を多く取る。 ＜具体的方策＞ ・年間5回担任との面談 ・選択科目のため教科面談 ・難関大志望者への面談	学校自己評価アンケート（生徒） ①3「先生は、普段からよく生徒を見て適切な助言をしてくれる」 ②5「先生は、生徒の学力が伸びるように授業改善に努めるなど、様々な教育活動に取り組んでいる」 ③6「進路相談について、面談などできめ細かく丁寧に指導してくれる」 肯定的評価の割合の平均（R3 生徒 87.4. %） 4：92％以上 3：88％以上 2：84％以上 1：84％未満	・面談を3回（4月、6月、9月）実施し、生徒個々の学習状況、興味関心、進路志望の把握に努めている。また、悩みがある生徒には随時面談を行っている。 ・定期考査前には質問教室を計画した。 ・各教科、一人一台端末を活用して、コロナによる学校休業中も授業配信等が速やかに行われ、効率的な学習ができるように工夫した。 ・今後10月の科目選択に向けて、担任のみならず教科の担当者から助言をもらうよう促し、幅広く生徒が情報を得て選択できるようにしたい。	B	学校自己評価アンケート（R4肯定的評価） ①3 生徒（1年次） 88.9%（R3 85.9%） ②5 生徒（1年次） 87.5%（R3 87.8%） ③6 生徒（1年次） 90.2%（R3 88.5%） これより肯定的評価の割合の平均は88. 9% 達成基準3 ・授業や教科での面談で、学力に合った適切な助言ができたことで、生徒との信頼関係が築けつつある。しかし、家庭での学習時間が10月時点で173分と、十分とはいえないので、個々の特性・能力に応じた課題設定や、授業の題材選び、授業実践の方法を工夫し、家庭学習時間をより自律的にできるようにしたい。	B	【課題】 ・家庭での学習時間173分で目標学習時間の180分に達せず、十分満足いくレベルではない。 【方策】 家庭学習の方法や質の向上を図るために、各教科でアドバイスする機会を増やす。また、授業の教材や実践方法を工夫、改善する。授業の質を向上させることにより、生徒の学習意欲が向上し。そのことにより家庭学習時間が増えるようにする。	B
	2 年次	個々の学力の的確な把握、個別最適な学習指導、自律的な学習の促進を図る。 ＜具体的方策＞ ①年5回の面談、必要に応じた教科面談 ②習熟度別授業、選択（または自主）課題設定 ③継続した授業改善、大学問題研究 ④難関大、岡山大志望者集団への働きかけ	学校自己評価アンケート（生徒） ①3「先生は、普段からよく生徒を見て適切な助言をしてくれる」（生徒肯定的評価の割合（R3 1年次 86.1%） ②5「先生は、生徒の学力が伸びるように授業改善に努めるなど、様々な教育活動に取り組んでいる」肯定的評価の割合（R3 1年次 87.2%） 肯定的評価の割合（それぞれ） 4：90％以上 3：85％以上 2：80％以上 1：80％未満	①担任面談3回（4月、6月、9月）を通し、生徒個々の学習状況・進路志望の把握に努めてきた。今後は、苦手教科のある生徒を随時教科面談へ移行させたい。 ②習熟度別授業、週末課題や夏季課題での選択または自主課題設定、定期考査前のフォローアップ講座を通し、学力層別の働きかけに努めている。 ③進路課、探究課と連動した、授業改善や大学入試問題研究を実施している。 ④昨年度3月に難関志望者面談を実施後、難関集会を9月に実施した。また「難関CC」と呼ぶ難関大志望者への個別指導を3教科を中心にスタートした。今後軌道に乗せたい。志望者の多い岡山大学や国公立大学に向けた対策を2学期以降行っていく。	B	学校自己評価アンケート（R4肯定的評価） ①3生徒（2年次） 86.5% 達成基準3 ②5 生徒（2年次） 86.5% 達成基準3 内容の近い別項目「進路相談について、面談などできめ細かく丁寧に指導してくれる」（R4 2年次89%）なども含め、高い水準で現状維持できていることは評価できる。	B	【課題】 同アンケート（生徒）で、「自分の家庭での学習状況は十分である（2年次目安・4時間）」生徒肯定的評価の割合（R4 2年次 38%）に留まった。学習実態調査（10月）でも家庭学習平均187分である。目標学習時間の240分には達していない。 【方策】 課題量を減らし、層別選択課題など個別最適化を進めてきたが、生徒は家庭学習における自主性を十分身につけていない。今後改めて家庭での勉強方法の指導を行うべきである。また、勉強をあきらめかけている生徒に個別のケアを行い、勉強へのきっかけを作る具体的な助言を行う。習熟度別クラスの標準グループに「学び直し」の機会を提供する。	
	3 年次	・年次全員が学力状況を把握、対応策に共通理解を持って取り組む。 ・同じ志を持ち、互いに学びあう仲間を作り、進路実現を目指す。	学校自己評価アンケート（生徒） ①5「先生は、生徒の学力が伸びるように授業改善に努めるなど、様々な教育活動に取り組んでいる」 肯定的評価の割合（R3 2年次 91.2%） 4：98％以上 3：92％以上 2：85％以上 1：85％未満	・夏季休業中の学習課題を、層別に明示した一覧を三者懇談で配布。それぞれの実力を高めるための学習を生徒自身が自発的にできた。 ・個別の添削指導、受験に向けた面接・小論文指導を開始・強化し、各生徒の学力は向上しつつある。 ・昨年度より導入された理科の習熟度別授業を今年度も実施。今年度も効果を実感している。	B	学校自己評価アンケート（R4肯定的評価） ①5 生徒（3年次） 92.7% 達成基準3 上記に加え、 8. 自分の家庭での学習状況は十分である。（1年次目安・3時間、2年次目安・4時間、3年次目安・5時間） 肯定的評価の割合（R4 3年次 78.9%）となった。 受験に向けて授業を大事にする雰囲気が醸成され、日々の取り組みに力を入れている。教室での自習等、互いに高め合う集団を形成することができた。	A	【課題】 入学当初にコロナ休校により学習習慣の定着が難しく、最終年度になって受験に向けて形にはなった。低年次（1、2年次）でいかに学習への動機付け、主体的な学びをさせるかが重要になる。 【方策】 ・学力向上とともに進学先や進学後の社会でのイメージを持たせることが大切である。職業体験等もできるだけその年次の生徒の希望が叶うよう新規企業の開拓や、生徒自身が動いて見つけるなどの取組も考えられる。 ・日頃の授業の充実も欠かせない。「面白い」「楽しい」だけでなく、対話的・体験的な学習の機会をいかに作り出すか、教師の授業力の向上を一層進める必要がある。	

本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動）	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
2 3年間を見通したキャリア教育計画に基づいた進路指導	進路課	・個々の生徒の進路実現を支援するために3年間を見通した進路指導計画や進路指導プログラムに基づいたLHRや総合的な探究の時間、面談などを通して、きめ細かい進路指導を行う。 ・最新の進路情報の提供を行い、生徒・保護者双方の進路意識を高めるために各年次進路だよりの配布や保護者会、進路講演会などを計画的に実施する。	学校自己評価アンケート(生徒) ①6「進路相談について、面談などできめ細かく丁寧に指導してくれる。」 肯定的評価の割合(R3 生徒 88.5%) 4: 93%以上 3: 90%以上 2: 80%以上 1: 80%未満	・各年次進路カレンダーを作成し、進路指導プログラムに基づいた計画的な進路指導を実践している。 ・進路だよりを計画的に発行(1年12回、2年15回、3年4回)し、タイムリーな情報発信と啓発活動を実施中。 ・3年次は5月に保護者対象進路説明会(WEB)を開催、1・2年次も10月の同会開催に向けて現在準備中である。 ・生徒対象進路講演会は、ベネッセ若間氏(1年5月)、リクルート山内氏(2年6月)、北九州予備校岩崎氏(3年6月)を招聘し実施。 ・8月、3年次生および2年次難関大志望者対象に外部講師(高予備)による特別講座を実施、意識の向上を図った。年度末にも同様の企画を準備中。	B	学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) ①6 生徒 90.2% 達成基準3 ・3年間を見通した進路指導計画や学習指導のスタンダードなどのマニュアルに沿った様々な取り組みによって、生徒の興味、関心、意欲が高まり、志望形成とその先の学びにつながる動的なシステムが構築されてきた。これにより、学校自己評価アンケート「進路相談について、面談などできめ細かく丁寧に指導してくれる。」の肯定的評価は90.2%(R3+1.7%)と改善した。 ・進路だよりを計画的に発行。(1年18回、2年27回、3年12回／1月末現在) ・難関大指導は、校内の計画的・継続的な指導に加えて、予備校講師による特別講座や講演会、難関大に通う本校卒業生との座談会など外部の人材活用により、さらなる充実を図ることができた。	B	【課題】 進路志望実現に向けた面談や保護者懇談、進路説明会などに対して、生徒・保護者の肯定的評価はともに前年を上回ったが、教員評価は逆に前年-7.8%という厳しい結果となった。よりよい進路指導を求め、情報発信を期待する先生方からの要望と受け止めている。 【方策】 今年度再編された系統的なキャリア教育プログラムの総括を行い、次年度に向けてプログラムの一部変更を検討をする。 今年度の取組をしっかりと検証し、次年度さらに充実した情報提供に努めていく。	B
	探究課	進路実現につながる系統的なキャリア教育プログラム構築 ①「総合的な探究の時間」・LHR計画に基づいて探究活動を実践しながら、進路課が作成する「進路カレンダー」と「キャリアロードマップ」が有機的に連関するように計画案の改善を図る。 ②スタディサプリの「活動メモ」及びM-PRIDE手帳を担任面談の際にも活用し、デジタルとアナログの利点を活かしながら、1年間の振り返りをキャリアパスポートにまとめる。	学校自己評価アンケート(生徒) ①7「総合的な探究の時間やLHR等が自らの進路設計に結びついている。」 肯定的評価の割合(R3 生徒 80%) 4: 85%以上 3: 80%以上 2: 70%以上 1: 70%未満	①1・2年次「総合的な探究の時間・LHR計画」に沿って活動を行っている。進路課、年次団と連携しながら活動の時期や進め方について見直しをしている。 ②1年次「活動メモ」入力についてのマニュアルを作成し、活用を進めている。	B	学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) ①7 生徒 78.1% 達成基準2 ・キャリアロードマップに従って進路探究と課題探究を進めることができたが、特に1年次生には、目的意識をもって取り組ませるための工夫が必要である。 ・クロームブックの「活動メモ」入力を推進できた。	B	【課題】 ・新しい形での「総合的な探究の時間」「LHR」の年間計画を実施するにあたって年次団内での共通認識が必要である。 ・課題研究の担当者の負担が大きい。 【方策】 ・各活動の目標を明確にし、進路課・年次団と連携を取って更に改善を進める。 ・課題研究の過程に外部講師の協力を依頼する。 ・探究活動の成果の発信につとめる。	
	1年次	生徒が探究活動を積極的に行い、将来の進路について具体的に考えられるようにするためにStart-up Programなどの行事や授業、集会を通して、自分を理解し、自分の住む地域のよさを発見させる。	学校自己評価アンケート(生徒) ①7「総合的な探究の時間やLHR等が自らの進路設計に結びついている。」 肯定的評価の割合(R3 生徒 80%) 4: 86%以上 3: 80%以上 2: 75%以上 1: 75%未満	・4月にStartup講演会と倉敷再発見フィールドワーク、7月にラーニングカフェを実施して、自己理解や地域理解を行うようにした。 ・進路とキャリア学習を連携させ、2学期の「私のキャリア構想」や課題研究入門講座でまとめる流れになっている。 ・進路カレンダーを作り、1年間の進路・キャリア教育の流れが見渡せるようになった。	B	学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) ①7 生徒(1年次)78. 1%(R3 80%)達成基準2 ・探究活動と進路を連携させて、生徒が将来の進路や地域の問題などを検討することはできたと思うが、自分の将来像が浮かんでいていない生徒が多いと予想されるので、アンケート結果の数字が伸びなかったと考えられる。	B	【課題】 ・まだ将来像のイメージが浮かんでいない生徒が多い。職業選択や大学での研究などについて選択の範囲や視野が狭い場合が多い。 【方策】 探究活動で有効な、自分の将来像を考えさせるような方法を検討する。特に、視野を広く持たせるように、卒業生であったり、地域の方から話を聞く機会を増やす。	
	2年次	自分の進路を開拓していく能力を育成するために、進路指導と連携した、一貫性のある探究活動を推進する。 ＜具体的方策＞ ①年間進路カレンダーに沿った系統的な進路学習 ②課題研究を通した探究活動の深化 ③生徒が自ら企画立案し、実行に移す機会創出 ④講師、卒業生など外部と接する機会増加	学校自己評価アンケート(生徒) ①7「総合的な探究の時間やLHR等が自らの進路設計に結びついている。」 肯定的評価の割合(R3 1年次 81.6%) 4: 85%以上 3: 80%以上 2: 75%以上 1: 75%未満 ②24「私は自分に誇りを感じたり、ものごとを成し遂げる能力が身についてきていると思う」 肯定的評価の割合(R3-1年次 72.4%) 4: 80%以上 3: 75%以上 2: 65%以上 1: 65%未満	①年間進路カレンダーを教室に掲示、進路便りでも提示、1年間の進路学習の流れを生徒に意識させている。 ②課題研究では毎回ルーブリックで目標を定め、各回の時間の有効利用を図っている。書籍の活用やクロムブックでの情報検索を通し、興味関心のある分野の探究活動を進めている。さまざまな資料を今後どのようにまとめていくかに力点を置きたい。 ③SDGs校外研修旅行や葦岡祭、また日々のHR活動や委員会活動など、生徒が自ら企画立案し、実行に移す機会は、明らかに1年時より増えている。 ④外部講師(関係機関・事業所訪問、夏季高松予備講座など)と接する機会はあったが、卒業生と接する機会がまだ取れていない。	B	学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) ①7 生徒(2年次)76.1% 達成基準2 ②24 生徒(2年次)73.7% 達成基準2 ともに「2」の評価に留まった。アンケートの時期が課題研究の発表・まとめ前であったことが影響したかもしれない。3学期に入り、課題研究のまとめ、それを生かした志望理由書の作成を通して、探究の経験を今後の進路へつなげる機会を設けている。	B	【課題】 ・探究活動を進路検討のきっかけにするという意識が生徒には薄かったようである。 【方策】 ・年次教員団が共通認識として、課題研究の成果を進路へ上手くつなげるよう配慮する。担任面談で課題研究の内容と自分自身の進路が関係があることを繰り返し伝える。三者懇談を実施し、保護者等にも共有の機会を作る。このことにより2年次末の志望理由書作成や3年次最初の面談での生徒理解に生かす。 ・課題研究の班ごとの面談回数を増やして、探究活動のさらなる深化を図る。班内の個々の役割分担、興味関心の度合いも把握できる。	

本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動）	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
2 3年間を見通したキャリア教育計画に基づいた進路指導	3 年次	・意図的・計画的な面談・学習実態調査等を実施する。 ・時期に応じた進路情報を発信する。	学校自己評価アンケート(生徒) ①6「進路相談について、面談などできめ細かく丁寧に指導してくれる」 肯定的評価の割合(R3 2年次 92.6%) 4: 98%以上 3: 95%以上 2: 85%以上 1: 85%未満	・定期および実力考查ごとに担任面談を実施。進路実現に向け、何にどう取り組むのか、具体的な指示により、行動を促している。 ・年次会議等で、一人一人の生徒の情報共有を綿密に行う。また入試に向けて、年次だけでなく、年次を超えた受験体制をつくり、継続的に指導していく。 ・岡大後期入試廃止等、入試情報を進路だよりで発信し、自分の学習の計画などに活用するように呼びかけている。	B	学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) ①6 生徒(3年次) 89% 達成基準2 3.「先生は、普段からよく生徒を見て適切な助言をしてくれる」。 生徒(3年次) 91% など、今一步目標に届かなかった。より高い志を持ち、少しでも学習効果が上がるべく、面談を実施した。年次会議では情報共有は出来ており、これ以上ないほどに生徒との面談の機会を増やし、知り得た情報の共有も行った。	B	【課題】 ・コロナ禍で保護者・生徒ともに安全志向で近隣の大学を志願する傾向が見られた。低学年から幅広い大学の魅力等を伝える必要がある。 【方策】 ・保護者への説明に外部の講師による講演(配信)を検討する。PTA総会等で講師を新たに依頼することも検討する。	B
本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動）	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
3 自律性と豊かなつながりを育む生活指導	生徒課	①信頼関係構築のツールとしての「あいさつ」の常態化を実現するため、あいさつ運動にとりくむ。 ②M-PRIDE手帳を活用したタイムマネジメント能力を伸長するため、手帳活用例を紹介するなど啓発にとりくむ。 ③健康・安全・衛生意識の向上をめざし、整美委員会・保健委員会の活動を「見える化」する。 ④教職員研修などを通じて、不応症症状とその要因に対する知見を深める。学校不応症症状とその要因について知見を深めるための教職員研修を実施する。	①学校自己評価アンケート(生徒) 11「社会のマナーやルール、校則について、指導が適切に行われていると感じる」 肯定的評価の割合(R3 生徒87.7%・保護者88.9% 生徒保護者の平均値) 4: 95%以上 3: 90%以上 2: 80%以上 1: 80%未満 ②14「M-PRIDE手帳を活用してスケジュール管理や目標設定等を行っている」 肯定的評価の割合(R3 生徒 34.0%) 4: 40%以上 3: 35%以上 2: 30%以上 1: 30%未満 ③学校自己評価アンケート(教職員) 13「校内は清掃が行き届いており、きれいな状態である」 肯定的評価の割合(R3 教職員 68.1%) 4: 75%以上 3: 70%以上 2: 60%以上 1: 60%未満 ④不応症症状とその要因に対する知見を深めるための教職員研修の回数 4: 3回 3: 2回 2: 1回 1: 0回	①風紀委員による「あいさつ運動」をこれまでに5回行った。また、交通委員による査察においてもあいさつを励行している。引き続き取り組む。 ②学習計画などM-PRIDE手帳の活用を進めている生徒は一定数存在するが、拡大が課題である。手帳活用例の紹介は10月以降、1・2年次を対象に行う。 ③オープンスクールや葦岡祭前後の校内整備、花壇の美化など整美委員の取組が活発に行われている。また保健委員は各行事における救護活動、熱中症予防やコロナウイルス感染対策において、「ほけんだより」や動画制作、昼食休憩時の全校放送などで大いに存在感を発揮している。後期も引き続き活発に取り組ませたい。 ④10月5日(水)に、教育相談に関する教職員研修(講義形式)を予定。2回目として、個別の対応例を題材に、実践的な研修を予定している。	B	学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) ①11 生徒 90.8% 達成基準3 ②14 生徒 37.6% 達成基準3 ③13 教職員 75.0% 達成基準4 ④ 1回 達成基準2 ①学校自己評価アンケート「「社会のマナーやルール、校則について、指導が適切に行われていると感じる」生徒90.8%・保護者90.9%・平均90.8%。 前年度より若干上昇した。参考:教職員75.0%(R3・65.3%, R2・82.3%) 風紀委員による「あいさつ運動」は年間7回実施した。交通委員による査察(10回)においてもあいさつを励行している。 ②学校自己評価アンケート「M-PRIDE手帳を活用してスケジュール管理や目標設定等を行っている」(生徒)37.6%。前年度比1割程度向上した。年次別にみると、1年次37%、2年次34%、3年次41%となっており、3年次で積極的に活用している様子がみられる。活用例の紹介ができていないのが課題である。1、2年次に複数回好例を紹介することにより、活用生徒が増加し、タイムマネジメント能力や、スモールステップ実現による自己肯定感の向上につながると考えられる。 ③学校自己評価アンケート(教職員)「校内は清掃が行き届いており、きれいな状態である」75.0%。前年度比1割程度向上した。生徒各種委員会の活動も活性化し、南高Blogなどの記事により「見える化」されている。 ④教育相談に関する教職員研修を1回実施した。教育相談チームと各年次(主任、担任等)の連携体制を確立することができた。	B	【課題】 ①アンケートでは若干評価が上昇したが、あいさつに関しては以前の南高の状態と比べれば、低調である。学習活動や特別活動などと同じく、言われればするが、言われなければしないといった受け身の姿勢が見て取れる。 ②同じくアンケートの数字は上昇したが、積極的な活用を自覚している生徒は少数派である。特に2年次で低率となっていることが大きな課題である。 ③委員会活動の活性化により、環境美化の意識・成果共に向上しているものと思えるが、ゴミの減量化・分別の徹底など新たな課題も顕在化している。 ④教育相談の体制は充実してきた。教員個々のスキルアップが今後の課題である。 【方策】 ①「あいさつ運動」を「見える化」することにより、「自分からあいさつしてみようか」という姿勢の変化を促す。例:終礼連絡での周知や昼休みの感染防止のための放送での周知、実施状況のブログ掲載、活動状況を保護者に知らせる、など。 ②1年次オリエンテーションで、上級生の手帳の活用例を紹介したり、好例と当該生徒の声を紹介したりするなど、活用を促す。 ③ゴミの減量化・分別の徹底にとりくむ。生徒会整美委員会でアイデアや標語を募集し、意識向上をはかる。 ④事例報告を中心とする研修会を開催する。好例を紹介する一方で、対応に困難を抱える事例も持ち寄り、共有し協働につなげる。	B

本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動）	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
3 自律性と豊かなつながりを育む生活指導	1年次	生徒が、自分と他人の関係を大切にし、自らが尊重されていると思えるようにするために年次集会や年次通信等で活動や取組みを上げる。	学校自己評価アンケート(生徒) ①2「倉敷南高校に入学してよかったと思う」 ②22「本校には1人ひとりが尊重され、まわりから受け入れられていると感じられる雰囲気がある」 二つの肯定的評価の割合の平均(R3 生徒 84.4%) 4: 90%以上 3: 85%以上 2: 80%以上 1: 80%未満	・年次集会で、本を紹介し、自分と他人のあり方について講話を行っている。それを基にして考えが深まる機会を創出している。 ・クラス目標を発表させたり、英単語テストで表彰したりして、取組を上げることに、自らが尊重されているという雰囲気を高めている。 ・今後も、定期的に活動を取り上げていく。	B	学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) ①2 生徒(1年次) 90.1% (R3 84.2%) ②22 生徒(1年次) 87.3% (R3 84.6%) これより肯定的評価の割合の平均は88.7% 達成基準3 ・年次集会で本を紹介して考えを深めることには成功しているが、自分と他人とのあり方について自分事として考えることは今ひとつできていないと感じる。 ・自らが尊重されているという雰囲気は徐々に高まっている。今後も定期的に行事に取り組んでいきたい。	B	【課題】 ・いろいろな機会が与えられ、いろいろな人の話を聞くことがあるが、他の人の話を生徒自身が自分事としてとらえられていない。 【方策】 ・年次集会等で話したことの感想や意見を出しあうことで、他人と自分の意見の相違や他の人からの参考となる点をみつけ、いろいろな話が自分事として考えられるようにする。	B
	2年次	自由に思考・発想できる雰囲気を作り、互いに多様性を尊重する精神を育む。仲間と協働し、新たなことに挑戦する精神を育む。 ＜具体的方策＞ ①年次集会等で継続的に「多様性の尊重」講話 ②葦岡祭での生徒の発想・工夫を尊重 ③新たに挑戦する、仲間との協働する機会創出 ④生徒を表彰する(褒める)場面の増加	学校自己評価アンケート(生徒) ①2「倉敷南高校に入学して良かったと思う」 肯定的評価の割合(R3 1年次 85.9%) 4: 90%以上 3: 85%以上 2: 80%以上 1: 80%未満 ② 23「本校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気がある」 肯定的評価の割合(R3 1年次 88.5%) 4: 90%以上 3: 85%以上 2: 80%以上 1: 80%未満	①年次集会等での講話をきっかけに、多様性を認める雰囲気はさらに醸成されつつある。 ②葦岡祭でのステージ発表での生徒の発想・工夫を、各クラス終礼や年次集会で大いに評価した。新たなことに挑戦する、仲間と協働する楽しさを理解する好機となった。 ③④Word Cupや長縄飛び大会など、多くの生徒や、クラスを表彰する機会が持てた。こうした機会がまだまだ少ないため、今後さらに創出していきたい。	B	学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) ①2 生徒(2年次) 86.5% 達成基準3 ②22 生徒(2年次) 87.1% 達成基準3 ・内容の近い別項目「私は自分に誇りを感じたり、ものごとを成し遂げる能力が身についてきていると思う」(R4 2年次74%)と他学年と比べてやや低い。日頃の声かけや面談でも自信を持たせるよう教員の相談スキル等の向上も図る必要がある。 ・新たに挑戦する機会、仲間と協働する機会をさらに増やした。SDGs研修旅行・葦岡祭・修学旅行・スポーツ大会はあったが、Word Cupや年次企画などは行えなかった。自分たちがやったことによって褒められる機会によって、自己肯定感・愛校心を高めさせたい。	B	【課題】 項目「私は自分に誇りを感じたり、ものごとを成し遂げる能力が身についてきていると思う」(R4 2年次74%)と他学年と比べてやや低い。 【方策】 3年次は入試があり、生徒は自信を失いがちである。日頃の声かけや面談でも自信を持たせるよう教員の相談スキル等の向上を図る。 来年度は、50周年記念の学校行事において、中心的な活躍が期待される。そうした機会を有効活用したい。	
	3年次	・生徒が主体的に活躍できる場・仕組みを作る。 ・生徒会活動・各種委員会の活性化し、自治能力を高める。	学校自己評価アンケート(生徒) ①10「葦岡祭をはじめとする学校行事に満足している。」 肯定的評価の割合(R3 2年次 90.5%) 4: 95%以上 3: 90%以上 2: 85%以上 1: 85%未満	・修学旅行代替行事も無事終了し、生徒の帰属意識、学校に対する信頼等は高まっていると感じる。 ・葦岡祭にとどまらず、生徒が自主的に動く場面を創出し、前向きに挑戦する意識を高めている。 ・今後も、新たなことに挑戦したり、自尊心を高めたりできる機会を(企画や行事を)定期的に創出することが課題である。	B	学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) ①10 生徒(3年次) 94.5% 達成基準3 に加え 8「自分の家庭での学習時間は十分である」生徒(3年次) 78.9% 生徒が動けるように指導した。こちらの期待以上に活躍し、達成感・自己肯定感は高まった。生徒を動かすことで、学校も変わる。自ら考え、意見をまとめ、実行するという自主性が育成できた。また、様々な行事を通じ、お互いを認め高め合う集団を形成することができた。生徒の成功体験は大きな財産で、自信につながる。	A	【課題】生徒が自ら考え、自主的に動ける生徒が少ない。 【方策】 コロナ禍の様々な制限下で、生徒が力を発揮する場を用意した。修学旅行代替行事や葦岡祭の3年次の演目変更等で行事ごとに生徒の意見を集めるなど、生徒が考える場を用意した。今後、そのような取組の検討を行う。	

本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動）	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
4 PDCAサイクルが機能する協働的な教職員組織	総務課	・協働的な組織運営と業務の効率化のため、英語科や生徒会・委員会、部活動との連携を図る。 ・ホームページに掲載する学校生活や部活動の撮影やブログ記事の作成を、生徒会広報委員会の生徒が活動できるよう指導する。	学校自己評価アンケート(教職員) ①17「カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れ、教育活動のPDCAサイクルが回り、その改善が進んでいる」 肯定的評価の割合 (R3 教職員 70.8%) 4 : 75%以上 3 : 70%以上 2 : 65%以上 1 : 65%未満 ②18「さまざまな教育活動にチームワークを意識して取り組み、授業・生徒指導などの連携がとれている。」 肯定的評価の割合 (R3 教職員 73.6%) 4 : 80%以上 3 : 75%以上 2 : 70%以上 1 : 70%未満	・葦岡セミナーで英検の級別対策講座や面接対策講座、オンライン英会話講座は英語科との連携で開始できた。 ・オープンスクールの説明誘導やホームページに掲載する学校生活や部活動の撮影やブログ記事の作成を、生徒会広報委員会の生徒が活動できるよう指導できた。ブログの日々更新によりホームページのアクセス数は県内8位、ブログ更新数は5位となった。今後も上位を維持できるよう、動画コンテンツを含めた更新計画を進める。	B	・「カシミア通信」に加えて季刊情報紙「南風」を作成し、中学校や学習塾へ1月末までに5回配付した。 ・ホームページの閲覧回数が増加し、県内第2位となった。開かれた学校づくりとして中学生やその保護者への情報提供となり、活動する本校生徒の自己肯定感につながった。	B	【課題】 ・行事写真の撮影やブログ投稿作業の業務分担を図ったが、一部の教員に負担が集中する時期があった。 ・今後も部活動や学校行事の動画作成には、生徒会や委員会の活動との連携が不可欠である。 【方策】 ・ブログ記事を生徒昇降口に掲示するなど、在校生も校内のニュースを確認、共有できる環境を継続的に維持できるよう業務分担をする。 ・本校生徒とともに、中学生やその保護者に対して特徴のある活動の短編動画を作成するなどインターネットによるコンスタントな情報発信を行う。	B
	教務課	・リーダー会議の会議録を作成して課員に配布する。 ・会議録は翌日（火曜日）までには作成して配布。 ・教務課所管の各種任務について、手順書を作成する。	③「9風通しの良い職場づくりや働き方改革が進んでいる。」 肯定的評価の割合 (R3 教職員 62.5%) 4 : 70%以上 3 : 65%以上 2 : 60%以上 1 : 60%未満 ④22「各課・分掌などの年間計画は適切に進められている。」	・毎週月曜日にリーダー会議を実施し、連絡・確認・情報共有をしている。また、会議録を翌日までに作成して課員に配布し、情報の徹底を図っている。 ・手順書は現在作成中。	B	・教務課リーダー会議・会議録は定例化し、指示・情報共有に大いに有効であった。 ・「手順書」はとりえず完成し、課員に配布できた。更なる改善・補足を目指す。	A	【課題】 「手順書」については、一応完成したものの、まだ不十分な部分がある。加えて「教務課年間業務予定表」も作成したが、まだ詳細が不足している。 【方策】 「教務課年間業務予定表」に基づいた「リーダー会議」「会議録」の更なる進化＆深化。「手順書」については、「マニュアル」部分に加えて、文章化しにくい「ハウツー」の部分を記述するように努める。	
	生徒課	・リーダー会議の記録を各チームに速やかに伝達する。 ・リーダー会議録の作成(木曜日開催→週内)と回覧(翌週月曜) ・年度当初、学校祭時期のサポートメンバーリスト作成と周知を年度内2回以上実施する。 ・年度当初や学校祭時期の業務量増大時には、各チーム相互にサポート体制をとり、機動的に対応する。	肯定的評価の割合 (R3 教職員 80.6%) 4 : 85%以上 3 : 80%以上 2 : 75%以上 1 : 75%未満	・リーダー会議の会議録の作成・回覧は予定通り実施できている。 ・学校祭時期の分掌については、例年のものを踏襲し新たな試みはできなかった。来年に向けての課題としたい。 ・生徒課内の業務分担やサポート体制は適切に機能している。特に学校祭時期においては、課長不在の折、副課長を中心に臨機応変に対応することができた。	B	・リーダー会議録の作成・回覧により生徒課内の情報共有ができた。 ・学校祭時期の分掌については、例年のものを踏襲し新たな試みはできなかった。来年に向けての課題としたい。 ・生徒課内の業務分担やサポート体制は適切に機能している。特に学校祭時期においては、課長不在の折、副課長を中心に臨機応変に対応することができた。	B	【課題】 ルーティンワークに加え、突発的な事件や事故・新たなタスクに即応する体制が脆弱である。 【方策】 サポートも含め、業務分担計画を細密化するとともに、誰が何の業務にかかっているかを「見える化」し、共有する。全教員で準備にあたる葦岡祭については、生徒課教員を中心に各分野の責任者(相談窓口)を明確化する。	
	進路課	・前年度の進路状況について、旧年次と進路課がその結果を分析した進路報告会を実施する。進路報告会(5月)、進路研修会(7月・12月)実施。3年進路検討会(7月・12月・1月)実施。 また、3年の進路検討会の一部を利用して全教員対象の進路研修会を実施、進路指導法についての共通理解を図る。 ・毎週定例の会議を開催し、年次ごとの計画確認や実践の報告・検証を行う。また、入試説明会や報告会などから得られた最新の進路情報などの共有を図る。 ・学習実態調査や実力考査、校外模試などの結果分析による生徒の学力の現状を把握し、授業等の指導に生かす。	学校自己評価アンケート(R4肯定的評価) ①17 教職員68.8% 達成基準2 ②18 教職員70.3% 達成基準2 ③19 教職員60.9% 達成基準2 ④22 教職員82.8% 達成基準3	・5月進路報告会、7月進路研修会は予定通り実施。今後も計画に従って順次開催。 ・課会議の定期開催により課内の縦横の情報共有は十分にはかれている。加えて今年度は、職員会議において年間2回(前期、後期)の学力分析報告会を計画実施し、現状把握と指導の方向性などを確認、共有する予定である。	B	年間計画に沿った各種の進路研修会に加えて、前期末、年度末には新規に1、2年次の学力分析報告会を実施。全体を通して進路情報や指導法などの共有を図り、組織的かつ計画的な進路指導を行うことができた。 ・3年次の進路指導の実践報告、研修に加えて1、2年次生の学力分析報告など、各年次が到達目標を掲げ、達成状況のプレゼンを年に複数回実施し、情報の共有を図れたことは、本校の教育活動において有効であった	B	【課題】今年度課題を残した総合型や学校推薦型入試の指導については、早期の修正が必要である。達成状況を検証し、次年度に向けて改善を図る予定である。 【方策】 進路報告会の時間をきちんと確保し、総合型・学校推薦型入試においての合格につなげる指導方法を継承する。	

本年度の具体的な学校経営目標	分掌	本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動）	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況と今後の課題	中間評価	最終自己評価 年度末の達成状況・課題	総合評価	本年度の課題と次年度への方策	総合評価
4 PDCAサイクルが機能する協働的な教職員組織	探究課	・リーダー会議の記録を各チームに速やかに伝達する。 ・チームリーダーを中心に連携を取り、行事やICT作業など業務量が増える際には年次・チームの枠を越えて対応する。 ・各自が担当した業務の内容を記録し、マニュアル化する。		・毎回のリーダー会議の記録を全メンバーに配付して、情報共有を行っている。 ・各担当者で業務の内容を記録に残している。さらに、業務の引継ぎがしやすいようにサーバーのフォルダーを整理する必要がある。	B	・分掌の業務は年間計画に基づいて進められた。 ・リーダー会議はうまく機能したが、チームリーダー、年次の担当者に仕事が集集中した時期がある。 ・次年度へ引継ぎがスムーズにできるように電子データを残している。	B	【課題】 ・業務が多岐に渡るため、効率化を図るために仕事を細分化して担当者を決めていたの で、担当以外の仕事については協力体制が 取りにくかった。 【方策】 ・課内業務担当の平準化を図る。各業務を複数で担当し、仕事の内容を把握できる人数を増やす。 ・各担当の業務における改善点を次年度へ引継ぐ。年度当初に前年度の業務内容について確認する。	B
	2年次	年次教員が協働する雰囲気を醸成する。生徒対応は情報共有を重視し、年次全体で同じ方針のもとであたる。 ＜具体的方策＞ ①年次教員の業務分担の平準化 ②指導に関わる意思統一を重視 ③年次会議の有効利用(議題の焦点化) ④クロムブックを活用した情報共有		・年次教員の業務分担は、クラス担任間、年次分掌内等で平準化するよう呼びかけ、現状極端な偏りは見られない。 ・年次会議や年次朝礼を有効活用し、年次教員内の意思統一はできている。 ・クロムブックの活用はますます進んでいる。ただし、生徒目線では、教員からの発信が次から次へ無秩序に来るように感じている生徒もいる。特に生徒への発信方法については、これまでの実践経験をもとに今後マニュアル作りが必要である。	B	・年次内の連携は図れており、業務分担も上手くできた。その一方で、ある時期に特定の分掌に仕事が集中することがあり、負担が大きくなっていた。 ・クロムブックの活用は昨年度に比べても効果的に行えている。その一方で、クロムブック導入による仕事量の増加も感じられる。また生徒の中には、情報の多さにクロムブックを開きたくないと感じている生徒もいる。	B	【課題】・分掌ごとの仕事が年間を通して平準化されるよう、年次でどの時期に何をするか、年間計画の慎重な検討が必要である。 ・クロムブックについては、生徒に対する情報発信などのマニュアル作りを行うサポートを行いたい。また対面で伝えること・クロムブックを使って伝えることなどの棲み分けを行い、クロムブックの使用を限定的にすることがより効果を生むと考えられる。 【方策】 クロムブックの活用について生徒の困り感が解消されるように教員での配信のルールを作る。少なくとも年次では共通した意識で取り組む。	
	3年次	・会議の要項と報告を事前に作成・周知し、会議時間の短縮に努める。 ・業務分担の平準化を目指しつつ、お互いが声を掛け合い、支え合う雰囲気を醸成する。		・年次会議では、活発に意見も交わされ、生徒を向上させる意欲にあふれている。 ・時として延長することもあるが、おおむね会議は勤務時間内に終えている。	B	・コロナの影響を1年次当初から受け、身体的にも精神的にもしんどさを抱えている生徒の存在があったなかで、面接により担任団は悩みに寄り添うよう努力した。 問題解決に向けて、年次集会も多く開催することとなったが、年次の協力により、生徒が前向きに受験に向かっている。	A	【課題】 年次団で出来るだけのことはしたつもりだが、取り組んだ後の反省が次にいかせなかった。せっかく取ったアンケートもうまく活用しきれていない現状があった。 【方策】 行事ごとに年次としても振り返る時間をとる。改善点の共有によって内容が深まる。学校評価アンケートも年次で共有し、改善に生かす。多忙化解消には業務精選は必須である。職場訪問等も生徒が直接アポイントを取って訪問するという方法もある。	